

〔書言字考節用集八〕言辭 悚懼ヲルル 文千字 恐ヲルル 蕙同 怖同 畏同 惶同

〔日本靈異記中〕已作寺用其寺物作牛役縁第九

於茲諸眷屬及同僚發慚愧心而慄无極謂作罪可恐豈應无報矣略 中

〔倭訓栞前編四十五〕おそれ 畏懼の類をよめり大虚より出たる語成べし俗にそらおそろしな

どもいへり西域記に嗚咀羅唐言上といへるも近し新撰字鏡に習又悸童蒙頌韻に恟靈異記に
慄をおそるとよめり全浙兵制に怕を譯せり略 中

おち 日本紀に兢戰をよめりおちる也靈異記慄もよめり

〔伊呂波字類抄久〕恐懼 恐惶 恐戰 恐悚 恐畏 恐鬱 恐異 恐歎 恐怖 恐恨

〔物類稱呼五〕おそろしこはし 畿内近國或は加賀及四國などにてををとろしいと云西國にてを

すいと云薩摩にては人に越て伊勢にてをかれいと云遠江にてをそおたいいふ駿河邊より

武藏近國にてをつかないいふ飛驒及尾州近國又は上總にてをそがいと云按にをそがい

と云詞は恐れ怖おのろの略語也こはいのこはを反しつむればかの直音となるしかればをそが

いとは恐れこはいの略也

〔日本書紀三〕戊午年十一月己巳皇師大舉將攻磯城彥略 中弟磯城慄然改容曰臣聞天壓神至且

夕畏懼オチカシマレ 下

〔日本書紀七〕四十年七月戊戌天皇詔群卿曰今東國不安暴神多起亦蝦夷悉叛屢略人民遣誰人

以平其亂群臣皆不知誰遣也日本武尊奏言臣則先勞西征是役必大確皇子之事矣時大確皇子愕

然之逃隱草中則遣使者召來爰天皇責曰汝不欲往往原補矣豈強遣耶何未對賊以豫懼甚焉

〔日本書紀九〕爰伐新羅之明年神功攝 麿坂王忍熊王共出菟餓野而祈狩之略 中赤猪忽出之登